

平成二十六年五月十日印刷  
〒一一一〇〇二二

台東区清川一―八―一一  
光照院 発行  
TEL〇三(三八七二)八四八七

# よりた院照光

道 詠

法然上人

千とせふる  
小松のもとを  
すみかにて  
無量寿佛の  
むかへをぞ待つ

## お袖をつかんで第五歩

### 死の縁が思うようにならないからこそ

光照院副住職 吉水 岳彦

#### ◆取り返しのつかないこと

一月の夜、いつものようにたくさんのおにぎりとお茶などを持って山谷地区、隅田川沿い、浅草商店街の三コースにわかれて配食を行っていたときのことです。わたしは浅草商店街コースをまわり、いつも会うおじさんとちと会話していると、川沿いコースをまわっているメンバーから呼び出しがあり、あわてて川沿いコースへ向かいました。電話の内容は、「大量の血を吐いているおじさんがいるんです。早く来てください！」というものでした。かけつけると、そこには血だらけになっているおじさんが横たわっていました。おじさんは周囲

の人に対して「いいから水をくれ！」という以外、動き回るような元気もない様子でした。しかし、ひとさじの会メンバーで看護師の女性によると、「正確なことは病院に行かなければわからないが、内臓からの出血であろうから、

お水は飲ませないほうがいい」とのことでした。そこですぐに救急車を呼びました。

「おじさん、もうすぐ救急車が来ますからね。一緒に病院へまいりますしょう」と声をかけると、「誰がそんなもの頼んだんだ。俺は病院行くくらいならここで死んだほうがマシだ。俺は絶対に行かない！」という返事が返ってきたのです。救急車は五分ほどで到着し



九州の大本山善導寺御忌法要にて住職が購入した牡丹の花。光照院のお庭で美しく咲きました。

ました。救急隊員の方が担架たんかを持って「さあ、これに乗っていきましよう」と何度声をかけても「絶対に行かない。いいからそつとしておいてくれ！」というばかり。結局、本人の同意を得られなければ病院へ運ぶことはできないので、救急車は戻っていききました。その後もおじさんは血を吐きながら苦しそうな様子でした。わたしたちが近くに行くと「水をくれ！くれないんならいいからあつちへ行つてくれ！」の繰り返し。しかし、水を飲ませることは容体を急変させる恐れもあってできません。そうかといって苦しい表情の中で必死に水を求めている姿を見ると、もうどうなつてもいいから水を差し上げたいとも思いうのです。おじさんの周りに付き添うメンバーのだれもがただ悩

み、オロオロとするだけでした。おじさんに近づこうとすれば、「あつちへ行け！」と力のかぎり叫ばれてしまいます。それがまた体力を奪うことになるかと思うと、近づくことすらできなくなっていました。結局どうすることもできないまま、「翌朝早くにまた来ますね」と声をかけてその場を離れてしまいました。わたしたちは遠くから手を合わせて祈る他ありませんでした。

翌朝早くにその場所をたずねると、すでにおじさんの姿はありませんでした。隣に寝ていた人から、昨夜わたしたちが立ち去つて数時間後に容体が急変して息を引き取り、わたしがたずねるまえに警察がご遺体を回収していったことを知らされました。

あの時おじさんから「あつちへ

行け！」と拒絶されたとしても、どうして最期さいしの時まで遠くからでも見守り続けることができなかったのか。なぜ意識が失われるまで見ていられなかったのか。これではおじさんをこちらから見放したことと同じなのではないか。ただ強い後悔の念と自分に対する腹立たしさが残りました。その後、おじさんに付き添ったメンバーと共に、吐血とけつの跡の前でおじさんの後世を祈り、お念佛を申してご回向をいたしました。くわえて、もう一度とわたしたちの側から手を離すことはしないと誓つたのでした。

#### ◆たった一度の出会い

古人の歌に「のちの世ときけば遠きに似たれども、知らずや今日もその日なるらん」とあります。

後世ごせや来世らいせと耳にするとすぐ遠くのことを感じるけれども、死の縁は無量であつて、いついかなる時に迎えるものかは誰にもわかりません。もしかしたら、今日がその日になるかもわからないのです。「二期一会いちごいちえ」の言葉のとおり、今日が最期になるかもしれないからこそ、如来さまのお導きとお救いを賜る日頃のお念佛が肝要なのであり、今この一瞬に目の前の人へそそぐ精一杯の慈愛がかけがえのないものとなるのです。

支縁活動を行う度に、新たな人に出会います。その出会いの一つひとつをむなしのものにするか否かは、自己の心が次第だと感じます。あくせくと毎日を過ごしている、ついなおざりになりがちなお会い。「亡くなったおじさ



比叡山延暦寺に安置されている西村公朝作「ふれ愛観音さま」です。たくさんの人とふれ愛って、お顔がますます輝いておられました！

んともつと早くに違う形で出会えていたならば……」と、活動の度に思い返します。歩み寄ろうとする者に「あつちへ行け！」と言わざるを得ないおじさんの心は、どれだけ苦しかったでしょう。人をはねのけ、近づけたくないと思うに至ったおじさんの歩みにどれほど多くの困難があったことでしょうか。今はもうおじさんに直接問うことはできません。

◆いま一瞬の「いのち」の尊さ

かつて浄土宗の第二祖聖光

上人は

「八万四千といわれる如

来さまの広大なみ教えは、すべて

ただ「死」の一字を説いているに

すぎないのです。だからこそ、死

を忘れることがなければ八万四

千の法門も自然に心得ることに

なるのです」と仰せになりました。

ある時急に出る息が入る息を待

たずして死んでしまう、そんな無常の世を生きていくのであるからこそ、いかなる時も「死」を念

つて、いま一瞬の「いのち」の尊さを忘れることなく、いかなる場所であつてもお念佛申して如来

さまの大悲の御光を求め日々

の歩みが大切だと教えられます。

如来さまのみ教えは深遠であり、

その修行の道は本来困難なものです。「般若心経」一巻を学び、

布施の行一つを修するといつても、智慧の眼の開かないわたし

たちに全うすることは極めて難しいものです。過去にも多くの者が

煩瑣な佛教哲学を振り回すこと

のみに心を奪われ、理屈をつけて

目の前のなすべきことをなおざ

りにしてきたことが伝えられて

います。しかし、この「念死念佛」

の用心は、自分も他人もみな同じ

く明日をも知れぬ「いのち」で

あると心の底から念うことで、自

然に助けたまえとお念佛が口か

らでます。そのように如来さまの

御名を呼び、お姿を心に想えば、

身の行いも自ずと調い、如来さま

の御心に順じた道を篤実に歩む

ことになるのです。

わたしがおじさんの死と出会

つて学ばせられたこと―忘れて

はならないこと―は、まさに無常

の世を「念死念佛」の用心をもつ

て生きゆくことでした。わたしは

日頃から自他共に明日をも知れ

ぬ「いのち」であると念つて念

佛申す日々を過ごし、いかなる出

会い方であっても、出会ったその一瞬の「いのち」の尊さを念<sup>おも</sup>つて接することができると自分とされるよう進んでゆくことを、今あらためてお浄土のおじさんに誓います。これから先、支縁の場で「あつちへ行け！」としか言ってくれない人に出会った時には、今度こそ言葉のみを聞くのではなく、「南無阿弥陀佛」と手を合わせ、それがその人の精一杯の姿であると受けとめ、隣にいさせていただけこうと思います。 合掌

《浄土宗第二祖聖光上人と藤の寺「吉祥寺」のこと》

浄土宗第二祖にして、誕生山吉祥寺の開山上人である聖光上人は、筑前香月(北九州市八幡西区)に香月城主の甥として誕生しました。しかし、上人が応保三年(一六二)五月六日に産声をあげてもまもなく、母親は産後の肥立ちが悪く急逝してしまいます。

そんな慈母の冥福を祈るために、聖光上人は七歳で佛門に入っ



藤の寺「吉祥寺」の山門です。境内は美しい藤の花でいっぱいです。

て修行に励み、成人の後に比叡山へ登って天台宗の学問を修めま<sup>す</sup>。そして、厳しい修行と学問の結果、比叡山一の学僧として生まれ故郷に戻って、九州の地に天台宗の教えを弘めることになりました。現代でいうならば、東大の大学院を主席で出て、九州の大学の学部長に大抜擢という具合でしょうか。

その後、建立に関わった五重塔の本尊製作を佛師運慶に依頼するため、都に登ります。この時、法然上人の噂を聞いて訪ねていき、そのお念佛のみ教えを聴いて

得心し、弟子となったのでした。聖光上人が「私にとっての积尊は法然上人である」とまで述べているのを目にすると、いかに法然上人に心酔していたかがうかがい知れます。

聖光上人は八年間法然上人のもとでお念佛のみ教えを学んだ後、再び九州に下って念佛を弘めることとなります。現在の藤の寺「吉祥寺」は、聖光上人が亡き母の供養にと、自分の生家の跡に庵を結び、念佛の日々を送られた場所です。後の香月城主が施主となり、今のように立派な精舎を建立したのでした。

吉祥寺の本尊阿弥陀如来像は、腹部に腹帯がまかれている珍しいお姿で、普段は秘佛となつています。そのお姿を直接に拝することができるのは、ちょうど藤の花の見頃に行われる吉祥寺の開山忌法要のみとなっております。

法要の日は百件以上の屋台がならび、何万人もの人が訪れて、大変にぎやかです。香月の町の高い丘の上に建つ伽藍の前庭には、「藤の寺」という名前の通り、長く垂れ下がる見事な藤棚があり、紫と白の花が美しく咲いています。

わたしはこの春に九州の大本



藤の花が立派過ぎて、右手奥にある本堂が見えません！

山善導寺にて行われた聖光上人の開山忌法要に出仕させていただきました。その折、本年十七回忌を迎えた先代住職が、「善導講」という、善導寺に行く光照院檀信徒の団体参拝を組んだことを思い出しました。

すぐにとというのは難しいかもしれませんが、わたしも先代にならって、みなさまを九州へお連れし、ぜひこの藤の寺「吉祥寺」に詣でてお念佛のひと時を過ごしたいと思いました。 合掌 住職 拝

お知らせ

《光照院お施餓鬼法要》

日 程 六月八日(日)

御齋(昼食) 十一時三十分から

法 話 十二時十五分から

法 要 十三時十五分

※法要の出欠と塔婆の申込、ご参詣の人数を同封のハガキにて必ずお知らせください。

《光照念佛会のお知らせ》

光照院では、昨年十二月よりお念佛とお写経を行う会を発足しました。開催日は毎月第三土曜日の午後十五時から二時間を予定しています。多くのみなさまのお越しをお待ちしております。

《ひとさじの会の活動について》

副住職が代表をつとめる社会的に弱い立場の方々を支縁する「ひとさじの会」の活動は、毎月第一・第三月曜日十五時から光照院にて行われています。もしご興味がありましたら、どうぞ遠慮なくお越しくださいませ。一緒におむすびを作ったり、良いご縁を結びましょう。

《被災地支援活動者募集》

光照院青少年育成善道会(通称てるてる会)では、今後も岩手県内の

仮設住宅等における支援活動を企画します。具体的なおことはまだ決まっておりますが、ご興味のある方は、副住職携帯電話(090-6115-8147)、もしくはEメールアドレス(gakugen@gmail.com)へご連絡くださいませ。多くの方のご参加を心よりお待ちしております。

《生活困窮者・震災支援金御礼》

日頃より、光照院や副住職の行う震災や生活困窮者の支援にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。誠にありがとうございます。昨年のお十夜以降も、多くの檀信徒のみなさまから多大なご寄付を賜りました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

今後も光照院では、出来る限り人と人との縁を支える「支縁」活動を展開してまいり所存です。みなさま、ご理解とご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。合掌

《光照院年中行事予定(案内)》

平成二十六年

五月十七日 光照念佛会

五月十九日 ひとさじの会

六月二日 ひとさじの会

六月八日 お施餓鬼法要

六月二十一日 光照念佛会

六月二十三日 ひとさじの会

七月七日 ひとさじの会

七月十二〜十六日 孟蘭盆会・棚経

七月十九日 光照念佛会

七月二十一日 ひとさじの会

八月四日 ひとさじの会

八月九日〜十六日 棚経

八月十六日 光照念佛会

八月二十五日 ひとさじの会

九月一日 ひとさじの会

九月十五日 ひとさじの会

九月二十日 光照念佛会

十月六日 ひとさじの会

十月十八日 光照念佛会

十月二十日 ひとさじの会

十一月三日 ひとさじの会

十一月九日 十夜放生会

《御仏具料寄進》

為 瑞雲院浄譽篤道聡穩大居士

十二回忌

為 光照院宗譽峯雲現誓大居士

五十回忌

壹百萬圓 施主 林 茂代殿

為 春岳博道居士

三十三回忌

壹拾萬圓 施主 宮本健一殿

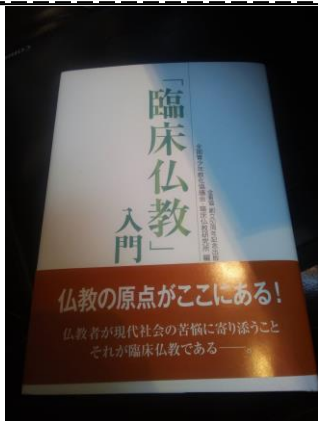
為 先代住職純譽現祐大和尚十七回忌

五拾萬圓 施主 光照院

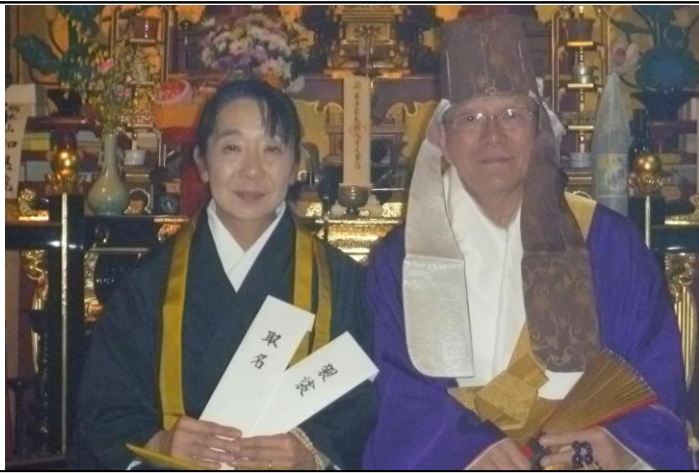
『写真でつづる光照院からの報告』

《『臨床仏教』入門』の出版》

住職の娘が勤める全国青少年教化協議会は、青少年の健全育成を目的とした仏教系の公益財団法人です。現在は、混迷する現代社会において、生老病死のあらゆる苦に向き合う仏教者、その名も「臨床仏教師」の養成を開始し、その第一期生がまもなく誕生します。講座は、座学・ワークショップ・実践研修の三課程から成りその座学講座をまとめた『臨床仏教』入門(二〇一三年、白馬社)が昨年末に出版されました。娘が編集作業を行った本に、なんと、講師として参加していた弟の副住職の講演まで収録されています。光照院の姉弟のことというよりは、むしろ、自殺やひきこもり、カルトなど、世間のさまざまに苦しみに真摯に向き合う仏教者たちのお話しをぜひご覧くださいませ。



出版された本の表紙です。



如来さまの御前で師僧と弟子のツーショットです♪

### 《光照院に「あまちゃん」誕生》

副住職と共にひとさじの会で活動をしてこられた女性が、今年一月にご出家をされました。そして、僧侶としての心構えを伝え、髪を切り、僧侶としての名前を授け、戸籍ならぬ僧籍に入ってもらった儀式「得度式」が、法然上人の御命日一月二十五日に光照院で営まれました。

そうなんです。光照院に誕生した「あまちゃん」は、海女ちゃんではなく尼ちゃんです！緊張しながらもしっかりと儀式をお勤めになり、立派な尼僧さんが誕生

いたしました。

新たに光照院住職の弟子となつた藤澤裕雅上人は、今後、勤務先の大学のお仕事を続けながらお釈迦さまや法然さまのみ教えを学びます。みなさまには、お施餓鬼の準備やお十夜会などであらためてご紹介をさせていただきまます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

合掌

### 《佛式結婚式》

光照院では昨年引き続き、この三月に新たに一組のカップルの佛式結婚式をつとめさせていただきました。

結婚したお二人は、副住職の大学時代の先輩の木村孝経上人と後輩の一色裕絵さんです。

料理上手な木村さんは、大変手間ヒマかけたおいしいゆで卵を持って、ひとさじの会の発会当初から炊き出しに参加してくれていました。裕絵さんは、そんな優しい彼とお付き合ひするようになってから、欠かすことなく二人一緒に参加してくれるようになりました。

結果として愛情が育まれたということなのでしょう。お二人は、その御礼を光照院の如来さまに申し述べ、住職に結婚式の相談をして、今年の三月三日に華やか



な結婚式を執り行いました。

佛式結婚式は、あまり大きな道具や装置を必要としません。如来さまのお掛け軸と花瓶などがあれば、どんな場所でも式場になります。お二人の場合は、お寺ではなくホテルで行いました。

新郎新婦は結婚式で、自分たちの書いてきた誓いのことばを如来さま、および親族や友人たちの前で読み上げ、その心を定めます。足りないところはお互いに補い合いながら、助け合つて生きていくことを誓った二人の表情は、どこか誇らしげでもありました。お二人が、いつまでもニコニコと励まし合つていける夫婦となることを心よりお祈り申し上げます。

### 編集後記

ひとさじの会はいま結婚ラッシュで、会員の結婚が今年だけで四組もあります。被災地や生活困窮者の支縁活動など、大変な時を共にした仲間の幸せは、心底嬉し

いものです。一方で、私が一人身でいることが目立つようになり、住職から「お前はどうかっているんだ？」との厳しい声が……。ご縁が調う時まで、せめて健康には留意しようと思います。(副)

### 《光照院へのアクセスについて》

台東区循環バス「北めぐりん」「浅草駅」から乗車し、光照院そばの九番「清川一丁目」停留所で降車ください。また、「甲42南千住車庫ゆき」バスご利用の場合は、「浅草松屋前」停留所から乗車し、「東浅草」停留所で降車ください。

### 《てらねい沙羅の一句》



### 春の陽射しの心地よさ

一日ニコニコ

寝子になる

まだ寝ててもいい？

てらねい 沙羅揮